

神戸 智行

一九七五年、岐阜市に生まれる。岐阜県立加納高等学校美術科で日本画に出会い、二〇〇一年、多摩美術大学大学院を修了。個展やグループ展を中心に発表。金箔・銀箔や典頁帖紙を重ね合わせ、奥行のある表現で自然をテーマに描いている。会場では、作品の形状や画面の余白によって、平面でありながら立体的に広がる空間を感じさせる作品を出品した。二〇一四年より、大宰府天満宮図書景襖絵の仕事を手掛けている。

青山 岐阜市出身で、加納高校に進学しました。日本画との出会いは高校時代？

神戸 僕は美術館の近所で生まれ育ち、本荘小学校、本荘中学校出身で高校は加納高校美術科に進学しました。そこで初めて日本画の画材に触れあう機会がありました。

青山 多摩美術大学に進学して、日本画を選んだのは、加納高校で出会った日本画の世界が影響していますか？

神戸 子どものころから絵を描くのが大好きで、沢山描いていました。同時に実家のすぐ裏が長良川だったので、帰ってきたら籠をもつて、虫を捕りに行ったり、川の中に入ったりしていました。加納高校に入った時、元々絵を描くことが好きで美術科を選んだのですが、一年生の時に日本画、油画、彫刻、デザインの四つの専攻を回る機会がありました。そこではじめて日本画の画材に触った時に「あ、これだ。これで描いていきたい」と思ったのが、最初のきっかけでした。大学入試の時も日本画材でずっと絵を描いていきたいと思って選びました。



青山 現代日本画の作家として紹介したいと今回思った七人の作家の内、四人が多摩美。多摩美は自由で色々な作家さんがいらつしゃいます。

神戸 僕も多摩美に進学したのは、当時好きな画家の出身が東京藝術大学か多摩美かのどちらかだったからです。加藤良造さんも先輩です。もちろん大学ではすれ違っていないのですが、大学一年生のころから良造さんの個展を見ていて、声かけていたりして、そこから会うたびに励ましていただいたりとか、色々とし強い作品を発表されている先輩が沢山いらつしゃったので、とても励まされています。

青山 二〇〇一年に大学院を修了、それからグループ展や個展を中心に制作して、公募展は考えなかった？

神戸 まず作家として自分自身の作品をつくっていくみたいという想いがあって、まわりの先輩方も独自で発表している方も多かったので、フリーでやっていこうと思いましたが、自然に目を向けることが強くなりました。

青山 個展の中で、二〇〇五、二〇〇六年ごろから「Innocent world」と題した個展のシリーズが始まります。

神戸 最初はまず好きで描いていたのですが、自分が何を求めて、一生何を作品のテーマとしてこれからやっていくかを考えたときに、まずは一番身近な生き物たち、自分が知っている長良川などの自分の原風景、原点からみなさんに何かメッセージやイメージを膨らましたものを提示しようと思いました。そこから始まったのが「Innocent world」でした。無邪気な、悪意のないという意味で日本語では訳しにくいです。その時から、自然界に目を向けることが強くなりました。

青山 モチーフでは水辺の生き物、草むらではバッタなど小さな生き物に目を向けるようになったと思うのですが、制作でも筆で描くだけではない作風が出てきたように思えます。今回の作品でも紙がポイントだと思えますが。

神戸 岐阜県民でよかったなと思います。それだけ自然に沢山の生き物たちがいたり、岐阜には美濃和紙という根付いたものがある、それがまだ身近な生活の中で見ることができます。それが自分の日本画の制作にも当たり前のように活かされています。日本画というどうしても絵具で描くというイメージばかりがありますが、実際には使っている画材は金箔や紙、絹だったり、様々な技術技法を使って先人たちは描いてきました。岐阜にいて、和紙の美しさを身近に感じていて、それを使って何かできないかと思うようになって、古典技法の裏彩色をヒントに作品をイメージすることができたので、本当に自分にとってよかったです。見えますか？

青山 本日（来場者の皆さんに）特別に使っている材料をお見せします。

神戸 いつも和紙はどんなものを使っているのかと聞かれることが多いので、今回実際に持ってきました。こういう薄い和紙を使っています。

青山 繊細でしょう。透けています。貴重な機会なので、ぜひ。大事にやさしく触ってあげてください。

神戸 日本は和紙で世界一の技術を持っています。さらに今は機械で漉いたりすることもでき、今まで手で漉いていたものよりも薄い和紙をつくることができます。それらの和紙は世界の美術館の古文書の修復などにも使われます。これらを使って描いた上にさらに薄い和紙を貼って、また描いて、貼ってというふうにそれぞれの作品は表

現されています。

青山 箔もお見せします。金箔はとっても繊細で、手の油にくっついてしまいます。少しでも息をふきかけるとくしゃくしゃになってしまうほど繊細な素材です。

神戸 後ろにある《ハナカスミ》は銀箔が、《未来へのかけ橋》には金箔が下地に貼ってあります。実際に金箔を触ると、汗や皮脂ですぐ手にくっついてやぶれてしまう材料です。

青山 絵具だけではなく、作品には**典具帖紙てんぐじょうし**も使われています。典具帖紙は土佐で作られているとても繊細な材料です。《未来へのかけ橋》には金箔が貼られています。これは何層？

神戸 四層ですね。

青山 複雑に紙が重ねられています。《ハナカスミ》は？

神戸 こちらも四層ぐらいですね。

青山 一番基底面にあるのは何箔ですか？

神戸 シルバーです。

青山 銀箔があつて、その上に**典具帖紙**、水の色が入って、さらに紙が入って、一番上に花びらがくる。筆で描くことができない水の深みが、薄い繊細な和紙を重ね、層ごとに銀箔や絵具、花びらを重ねることによって表現されています。日本画という筆で描くと考えますが、こうした素材を効果的に使うのはいつごろから？

神戸 元々学生のころから、大学院になるときから和紙を使って何かできないかと思っていました。当時は工場で薄さや何グラムで、こういう表情で原料を使ってと特

注で澆いていただいたりしたことがあって。そうすると厚みに限界があって、薄い紙が漉けないと。実際の修復の現場ではとても薄い紙ができたと修復士の先生から伺って、その薄い紙を使って何かできないかということで、十年以上前から始めました。

青山 やはり二〇〇五年や二〇〇六年ごろからですよ？今回、日本画のイメージをいい意味で裏切るような、驚いて新しい世界を開くような作品を選びたいと思います。神戸さんの作品は層をつくりながら紙を重ねていくことで、描くことではできない絵の深みが小さな生き物を通じて生まれています。最初タイトルを聞いたときはどう思いましたか？

神戸 スターウォーズのような、逆襲?!とと思いましたけど、メンバーを見たときに今若手で活躍している面白い作家だったり、自分の好きな先輩だったり一緒に並べることができると聞いて、すごく励みになりましたし、嬉しかったです。

青山 ありがとうございます。逆襲という言葉を選んだ時、スターウォーズの「帝国の逆襲」はちょうどだけ頭にありました。

今回は当館所蔵の木曾川を描いた《いつもの時間》以降の、より大きな空間を使った《ハナカスミ》と《未来へのかけ橋》という円形の作品、三メートルの高さの《星のオベリスク》を展示しています。《星のオベリスク》と《未来へのかけ橋》はシンガポールのジャパン・クリエイティブ・センターでの個展で発表されたものです。《未来へのかけ橋》は《ハナモヨウ》を右、《アカネモヨウ》を左として見ることを意図しています。地球儀と聞いたのですが？

神戸 シンガポールは今、アジアの中でも色々な国のたくさんの方々が来て、様々な企業が入って進化している国です。国としては若い、歴史のない国ですが、色々な種が集まって発展を遂げています。この作品は地球儀に見立てて地図をイメージして、中心にシンガポールの位置を置きながら構成しています。もちろん、これはぐるっと回って色々な角度から見ていただけます。現在では、日本画の絵というと壁掛けとありますが、実際昔は天井画があったりとか、襖絵、杉戸絵もあったり、間仕切りになっていたりと、色々な生活の中にあっただけです。そういったものを現代の展示空間で面白い見せ方ができないかを考えていました。シンガポールでは自然光の入る会場でしたので、日本画の材料である和紙や金箔が、時間によって変わる色々な光で見え方が変わってくるという、昔からある日本の絵画の見せ方も伝えたいと思って描いた作品です。

青山 この作品は以前、「今をいろいろ――現代日本画の世界」という三年前の展覧会で紹介しました。その時は壁に掛ける形で紹介したのですが、今回はフラットな丸い展示台で再現してみたいと思います。どうしても当館では自然光が入らないので人工の光になりますが、金属の箔というのは光で色々と表情を変えるので、自然光のもとでは違う見え方をするだろうと思います。《星のオベリスク》も実は世界を意識して描かれたと聞きました。

神戸 ちょうどこの作品もシンガポールの別の会場で展示するときでした。金魚という生き物は元々フナ科の生き物で色々な種類がいても群れで生きる性質があります。金魚を白人や黒人、黄色人種やミックスだったり色々な人種や宗教や民族、色々な立場に例えました。でもモニュメントとしてみんな平和に仲良く過ごせたらいいなと、

金というのはずっと光輝き、色あせないのです、この想いが永遠に続くようにと願いを込めてつくりました。

青山 《星のオベリスク》というタイトルについて。星は金魚を見立てた言葉ですか？

神戸 金魚を星という形で、ずっと光ってほしいという思いでつけています。

青山 タイトルはすごく考えてつけますか？

神戸 実際、ナンヤローネアートツアー（註一）のみなさんに参加していただいて、感じましたが、僕たち作家は作品を完成させたら、その場において説明できるわけではなく、本当に鑑賞者によって、作品は独り歩きしていくというか、受け手によって色々な形で捉えられるものになります。僕自身は今話したようなイメージをつくらせているんですけども、こうでなければだめだと思うタイプではないです。ただ、僕自身がこう考えているというのがあります。タイトルがその入口になるようなものとしてつくれば、言葉というツールは同じなので、自分はこう捉えているということ的全部そこで言うわけではないけれど、扉のような感じで考えてタイトルをつけています。

青山 《ハナモヨウ》《アカネモヨウ》も《未来へのかけ橋》という思いを入れていますね。

神戸 そうですね。シンガポールは若い国です。日本は伝統のある国として世界でも有数の国だと思いますが、それとは対照的な新しい国がそこを基準に世界を回していったりと。もちろん自分たち日本人も、同じ社会に生きているので、そういった国々とも仲良くやっていけたらいいなと思います、次の世代の子どもたちへ向けてつくった作品です。

青山 《ハナカスミ》は在外研修（文化庁芸術家在外研修制度）の結果を発表する「DOMANI」という展覧会で国立新美術館の非常に天井の高い会場で発表されました。やはり在外研修ということで世界を意識したところがありますか？

神戸 国立新美術館は会場の天井が八メートルの高さで、横幅が十五メートルくらいだったかな。一ブロックを使っているということでしたので、大作で世界を表現したいと思いました。作家にとっては中々ない機会なので、そういう意味では目一杯空間を使おうということでこういう形をとりました。在外研修は日本人として海外に出ることで、今自分が生きている社会で何ができるかを考えるきっかけになりました。あらためて日本人でよかったなと思うことがありました。自分の作品に使う材料をつくる日本の職人の素晴らしいところも自分の作品に盛り込んでいきたいと思っています。

青山 ちょうど今東京の日本橋高島屋で千人以上の芸術家が派遣された在外研修の五十周年の記念展が開催されています。今は太宰府で襖絵の仕事を手掛けていますね？

神戸 福岡県の太宰府天満宮の文書館の襖絵を描いてほしいと宮司さまからお話があり、今手掛けようと思っってはや三年たちました。とてもたくさんさんの想いや歴史が詰まった場所なので、実際に生活をしながら、まずその歴史や文化、習慣を知ろうと思いました。普段岐阜県に住んでいて、よくアブラゼミを見ていたのですが、向こうではアブラゼミをあまり見なくて、ミンミンゼミやクマゼミをよく見るとか、虫の生態が本州と九州とで違っていることにも気づかされました。また、お祭りや行事に参

註一 岐阜県美術館で行っている、アートコミュニケーション作品《Sudō Studio Sudō》を取り入れた鑑賞プログラム。作品を鑑賞したとき自分が何を感じているかを探り、表現し、参加者同士で交流する。



加したりなど、そこで生活することでしかわからない文化や習慣を学んだり、発見することも多くて、構想がふくらみます。ただ、五年後には発表することになっていきますので、また岐阜のみなさまにもお見せできるような作品をつくりたいと思っています。

青山 長年かけてできる作品ということでも期待が高まります。

会場からの質問 紅葉があるのですが、それは押し花か何かを使っていますか？色が全然変わらないのですが、どのように構成されているのでしょうか？

神戸 押し花ではなくて、和紙に色をつけて、それを紅葉の形に切っているんです。一枚一枚。それをカラージュのように貼って、それをまた上に和紙をかけることでめくれることなくフラットになっています。それと日本画の絵具で描いたものなど、ちよつとした浮き沈みを使い描き分けています。

青山 描くだけではなく、西洋美術というカラージュ、貼り重ねるといふ仕事も入っています。